小重（こじゅう）遺跡出土の備蓄銭について

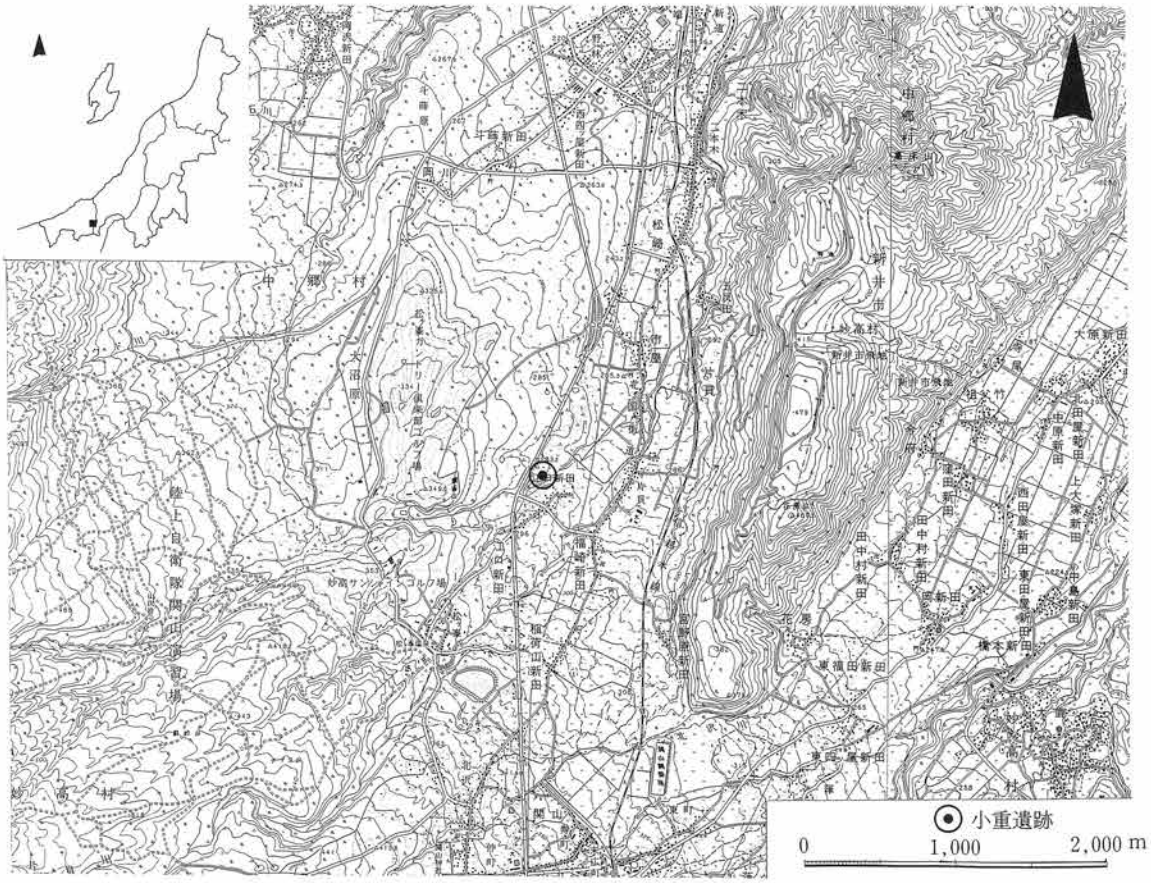
戸根与八郎・鈴木俊成

1　は　じ　め　に

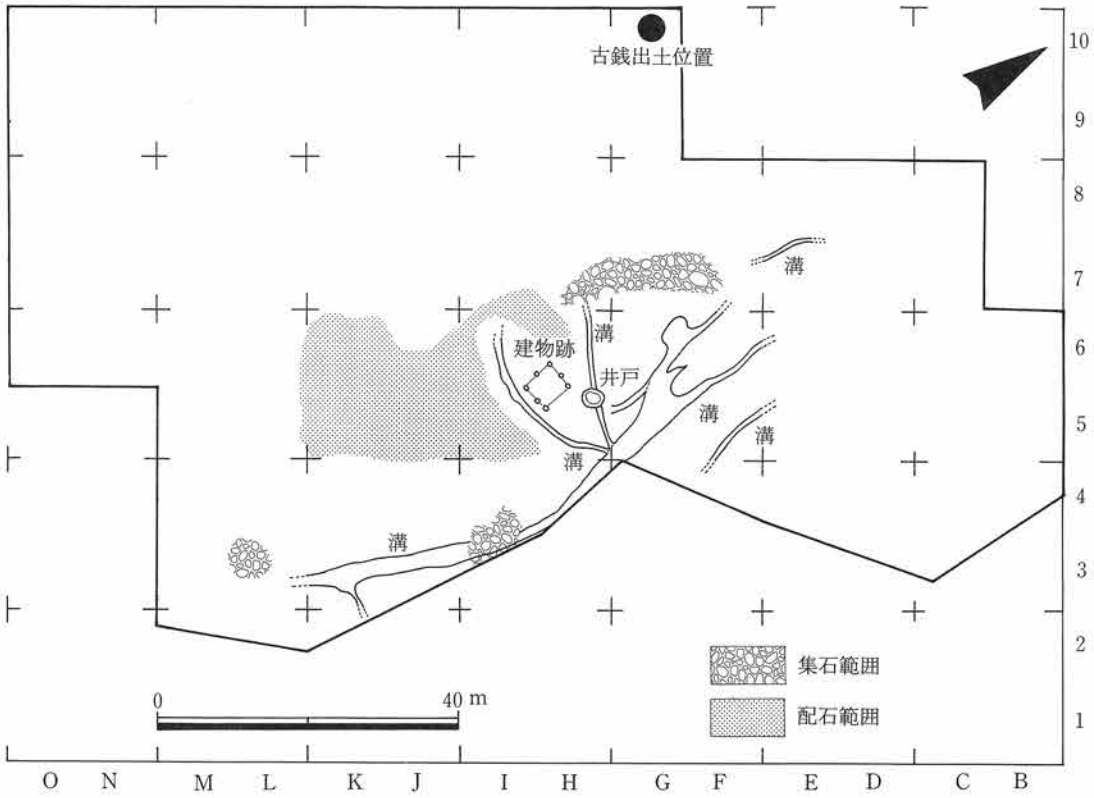
出土銭貨の研究は郷土史の解明につながるばかりでなく、当時の広域的な経済活動及び埋納の状態から推測される民俗学的思考・行動を解明する上で貴重な資料を提供してくれる。しかしながら、出土銭貨の多くは工事等により偶然発見される場合が多く、出土状態から古銭埋納の様子までを記録にとどめるものは少ない。このようにして出土したものは、貴重な資料であるにもかかわらず情報量が極めて少ないと言えよう。

本誌で紹介する小重遺跡の備蓄銭は、遺跡の発掘調査により出土したもので、出土から取り上げまで記録化され、その後の基礎整理においても、さし単位の数量・銭貨名を一覧化することができた。ここに基礎データを広く公開し、研究の早期進展をはかるため、本報告の前に本誌をかりて速報としたい。なお、基礎データーの集計は主に平成２年に行っている。

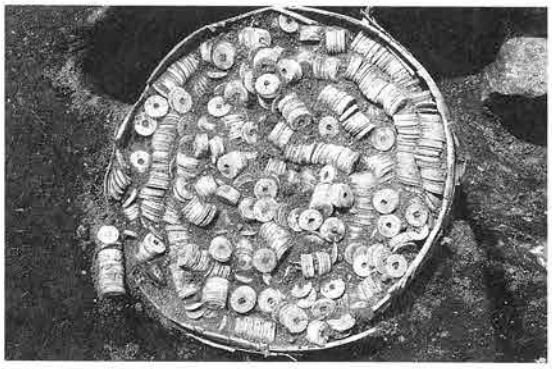
報告するにあったて慶応大学の鈴木公雄先生、東京都埋蔵文化財センターの竹尾　進氏から貴重なご教



第１図　小重遺跡の位置（国土地理院発行　1：25,000地形図　猿橋（H.3.6.1）・関山（H.3.11.1）を1/2縮尺）



第2図　小重遺跡　遺構略配置図（主に中世以降）



第3図　古銭出土状況

第4図　出土古銭サシ状態

第5図　集石群

第6図　集石下の墓坑群

示をいただいた。特に、竹尾氏からは銭貨の判読について御協力並びに御指導いただき、その成果の一部を掲載させていただいた。記して感謝申し上げる。

2　遺跡の概要と備蓄銭の出土状況

遺跡は長野県との県境に近い中頸城郡中郷村大字市屋字横引に所在する。遺跡周辺は南西に位置する妙高山の火砕流により、起伏のある緩斜面を成す。遺跡の標高は約280mで南に大きく傾斜し、東に流れる小河川に区切られ、舌状の地形をなしている。

調査は上新バイパス建設に伴い平成元年・2年の2か年にわたり実施され、約11,200m²を調査した。遺跡の時期は縄文時代前期と中近世に大きく2分されるが、ここでは古銭を中心とした中近世に絞り、その概要を説明する。

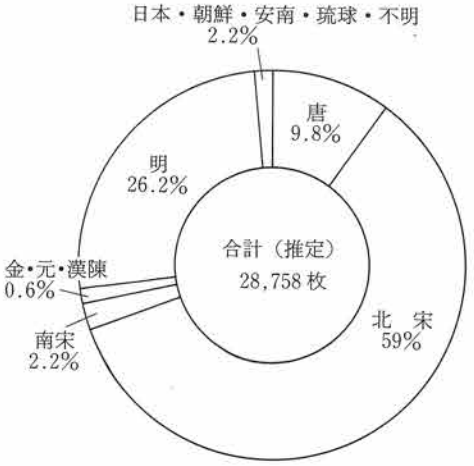
調査区のほぼ中央には、掘立柱建物1棟と井戸・溝が発見され、その北西には集石墓群と考えられる該期の遺構が検出された（第2図）。遺物は散発的ではあるが、珠洲焼片・青磁片等が出土している。これらの遺構と備蓄銭の関係は本格的な整理を待たなければ明らかにはならないが、時期的には極めて近い関係にあるものと考えらる。

備蓄銭の出土位置は前記した遺構群の中心から約40mの距離を隔てている。周辺には関連する遺構は無く、備蓄銭は砂利混じりの火砕流を掘り込んだ穴に埋められた曲物（長径36.3cm・短径32.2cm・深さ37.3cmの楕円形曲物）に納められていた。曲物は樺皮結合で側板の結合部分には漆が部分的に残り、接着剤として用いられたと考えられる。蓋は発見できなかったが、内容物の遺存状態は良好で曲物を密閉した可能性は高い。また、曲物の材は杉と考えられる。銭貨はさしに通された状態で出土したものも多く、サシに用いた軽くよった藁も生々しい。銭貨の埋納状態は曲物底部付近にバラの銭貨が湿気防止のためと考えられる多量の籾殻と混合され、その上位にサシに通された銭貨が曲物の口まで埋納されていた。また、銭貨自体の腐食は少なく銭名が容易に判読できるものが多かった。

3　ま　と　め

本遺跡出土の銭貨はすべて銅銭で、表1に示すとおり86種以上（無文を含む）、28,758枚以上を数える。この分類は銭名のみによる分類で、書体及び後鋳・私鋳などの分類を行えばさらに種類は多くなる。銭名不詳としたものは、銭面が摩滅しているために銭名が判読できないものである。また、無文としたものは打ちヒラメの鐚銭や方孔四方にたがね状のもので切り込み傷を付けた「星形孔銭」も混入しているが、その数量・銭種については未整理である。

銭貨の比率を鋳造国別に見ると、北宋銭が最も多く、26種16,932枚で全体の約59%を占めている。次は、絶対量は少ないが明銭で5種7,546枚で26.2%、唐銭が2種2,817枚で9.8%、南宋銭19種638枚で2.2%の比率を示している。このほかに比率では極めて小さい値を



第7図　銭貨の比率（銭造国別）

表１　小重遺跡出土古銭（竹尾　進氏作成）

銭　　銘	読	サシ＋バラ	不明古銭	クズ古銭	計	%
開元通宝	対	2646	15	26	2,687	9.3
乾元重宝	対	130	—	—	130	0.5
神功開宝	順	2	—	—	2	0.007
富寿神宝	順	1	—	—	1	0.003
天漢元宝	順	3	—	—	3	0.01
光天元宝	順	2	—	—	2	0.007
乾徳元宝	順	4	—	—	4	0.01
咸康元宝	順	5	—	—	5	0.02
周元通宝	対	8	—	—	8	0.03
唐国通宝	対	21	—	—	21	0.07
宋元通宝	順	64	—	—	64	0.2
太平通宝	対	126	—	1	127	0.4
天福鎮宝	対	—	1	—	1	0.007
淳化元宝	順	137	2	1	140	0.5
至道元宝	順	249	3	—	252	0.9
咸平元宝	順	330	—	1	331	1
景徳元宝	順	403	3	1	407	1
祥符元宝	順	503	1	1	505	2
祥符通宝	順	327	2	1	330	1
天禧通宝	順	376	2	1	379	1
天聖元宝	順	902	6	5	913	3
天聖通宝		1	—	—	1	0.003
明道元宝	順	86	—	—	86	0.3
景祐元宝	順	280	2	—	282	1
皇宋通宝	対	2345	21	31	2,397	8
至和元宝	順	207	2	—	209	0.7
至和通宝	対	47	2	1	50	0.2
嘉祐元宝	順	229	1	1	231	0.8
嘉祐通宝	対	417	12	2	431	1
済寧通宝		3	—	—	3	0.003
治平元宝	順	381	1	1	383	1
治平通宝	対	61	1	—	62	0.2
熙寧元宝	順	2053	2	1	2,056	7.1
元豊通宝	順	2049	12	12	2,073	7.2
元祐通宝	順	1694	18	10	1,722	6
紹聖元宝	順	783	10	8	801	3
紹聖通宝	対	2	—	—	2	0.007
海東通宝	順	2	—	—	2	0.007
元符通宝	順	258	1	1	260	0.9
聖宋元宝	順	767	6	14	787	3
大観通宝	対	483	1	—	484	2
政和通宝	対	1022	4	2	1,028	4
宣和通宝	順	133	1	1	135	0.5
建炎通宝	対	13	1		14	0.05
紹興通宝	対	2	—	—	2	0.007
紹興元宝	順	11	—	—	11	0.04
正隆元宝	順	93	—	—	93	0.3
大定通宝	対	50	—	—	50	0.2
淳熙元宝	順	91	1	1	93	0.3
紹熙元宝	順	53	—	—	53	0.2
紹熙通宝		1	1	—	2	0.007
慶元通宝	順	35	—	—	35	0.1
嘉泰通宝	対	31	—	—	31	0.1
開禧通宝	順	12	—	1	13	0.05
嘉定通宝	対	91	—	2	93	0.3
大宋元宝	順	3	—	—	3	0.01
紹定通宝	対	49	—	—	49	0.2
端平元宝	順	14	—	—	14	0.05
嘉熙通宝	対	8	—	—	8	0.03
淳祐元宝	順	61	—	—	61	0.2
皇宋元宝	順	33	—	1	34	0.1
開慶通宝	対	1	—	—	1	0.03
景定元宝	対	56	—	—	56	0.2
咸淳元宝	対	64	1	—	65	0.2
至大通宝	対	19	—	—	19	0.07
至正通宝	対	13	—	—	13	0.05
天定通宝	対	2	—	—	2	0.007
大義通宝	対	1	—	—	1	0.003
大中通宝	対	52	—	—	52	0.2
洪武通宝	対	3393	—	2	3,395	11.8

銭　　銘	読	サシ＋バラ	不明古銭	クズ古銭	計	%
咸元通宝		1	—	—	1	0.003
永楽通宝	対	3587	—	3	3,588	12
朝鮮通宝	対	261	—	—	261	0.9
宣徳通宝	対	509	—	—	509	1.8
紹平通宝	対	1	—	—	1	0.003
大世通宝	対	7	—	—	7	0.02
世高通宝	対	13	—	—	13	0.05
宣和元宝	対	1	—	—	1	0.003
万国通宝		1	—	—	1	0.003
熙寧重宝		1	—	—	1	0.003
宋聖開宝		1	—	—	1	0.003
天盛元宝	順	2	—	—	2	0.009
太平興宝	対	1	—	—	1	0.003
大治通宝	対	1	—	—	1	0.003
弘治通宝	対	2	—	—	2	0.007
判読不可		※　376	122	2	502	
——			79	—	79	
開元通宝？	対		1	16	17	
熙寧元宝？	順		—	7	7	
元符通宝？	順		—	1	1	
聖宋元宝？	順		1	—	1	
永楽通宝？	対		1	—	1	
私鋳銭　？	？		1	—	1	
景□元宝	順		1	—	1	
淳□元宝	順		1	—	1	
□宋元宝	順		1	—	1	
□祐元宝	順		2	—	2	
□聖元宝	順		1	—	1	
□和通宝	対		2	—	2	
□元通宝	順		1	—	1	
□平□宝	対		1	—	1	
□福□宝	対		1	—	1	
元□□□	順		—	1	1	
□熙元□	順		—	1	1	
□熙□□	順		—	2	2	
□熙元宝	順		—	1	1	
□□元宝	順		13	24	37	
□□元宝	対		1	—	1	
□□元宝	？		1	—	1	
□□元□	順		—	24	24	
□□通宝	順		5	10	15	
□□通宝	対		4	1	5	
□□通□	順		—	13	13	
□□通□	対		—	42	42	
□□□宝			—	85	85	
□□元宝	順	背下に六	—	1	1	
□元□宝	対	背下に二	—	1	1	
□□元□	順	背上に三	—	1	1	
乾元重宝or乾徳元宝			—	2	2	
太平通宝or治平通宝			—	2	2	
祥符元宝or祥符通宝			—	6	6	
天禧通宝or天聖元宝			—	1	1	
天禧通宝or開禧通宝			—	5	5	
天聖元宝or紹聖元宝			—	2	2	
景祐or嘉祐元宝or元祐通宝			—	1	1	
嘉祐元宝or嘉祐通宝			—	3	3	
治平元宝or治平通宝			—	3	3	
元豊通宝or元祐通宝			—	1	1	
元豊or元祐or元符通宝			—	15	15	
大観or大定or大中			—	3	3	
大観or大宋or大定or大中			—	1	1	
政和通宝or宣和通宝			—	10	10	
淳熙元宝or淳祐元宝			—	2	2	
嘉泰通宝or嘉定通宝			—	2	2	
嘉泰or嘉定or嘉熙通宝			—	1	1	
嘉定or景定or大定通宝			—	1	1	

※不明古銭　376枚　　クズ古銭　427枚
推定総数：28,758～28,986枚

註１．不明古銭は県教委作成の表の無文と銭名不詳銭を合算したものである。
２．クズ古銭は破片数が427枚あり、そのうち全ての古銭に共通する「宝」の破片数が199枚であった。
そして、当初総数の28,559枚に足したものが、上記の推定総数となった。
３．読は順読か対読の意である。
４．不明古銭の —— は摩耗が著しく、銘字の有無を確認できないものである。
５．％は、総数28,758枚と推定した割合である。

示すが、日本銭２種３枚、安南銭２種２枚、琉球銭２種20枚、朝鮮銭１種261枚など、中国以外で鋳造された銭貨も含まれる。

銭名別に見た場合、唐の開元通宝が9.3%、北宋の熙寧元宝が7.1%・元宝通宝が7.2%・元祐通宝が６%、明の洪武通宝が11.8%・永楽通宝が12.5%で、全体に占める比率も大きい。唐の開元通宝が9.3%と多いのは、中国において産出した銅銭の絶対量の多寡に影響を受けた結果と考えられる。また、永楽通宝と洪武通宝の流通については、永楽通宝が東国に、洪武通宝が西日本・九州にとりわけ流通する傾向があると言われているが、永楽通宝と洪武通宝の出土比率が近似している点は注目に値するものと思われる。

サシの状態で発見された枚数は12,765枚で、総枚数の約44.7%である。総計121連確認されたが、90から100枚の範疇にはいるものは41連で、全体の34%を占め、100枚一サシのものは１連１例のみである。このうち97枚一サシのものは18連あり、サシ全体から見ると、97枚一サシのものは約15%を占めるに過ぎない。調査時の取り扱いの不慣れ、ないしは一サシの結び目の欠失等から枚数の多寡があるのであろう。しかし、一サシの枚数がすべて同数であるという類例は、国内では現在知られていない。このため一サシの枚数に、多寡があってもよいものと思われるが、あまりにも枚数に差があるものは調査時の取扱い不慣れに起因するものであろう。

一サシの中で使用されている銭種は、限定されておらず混在している。また、サシのものとバラになっていたものとの銭種の比は76：75で大差がない。両者での銭種もほぼ同じものが多いが、枚数に差がある。バラにあってサシに無いものは海東通宝・紹熙通宝・大宋元宝・至正通宝・大義通宝・宣和元宝・万国通宝・熙寧重宝・宋聖開宝の９種が、逆にサシにあってバラにないものは富寿神宝・天漢元宝・天聖通宝・紹興通宝・開慶通宝・咸元通宝・紹平通宝・弘治通宝・紹平寧宝・天盛元宝・太平興宝・大治通宝・治聖元宝の13種あるがいずれも枚数は少ない。

出土した銭貨の上限はバラおよびサシであっても唐の開元通宝（初鋳年1488年）である。下限はバラで琉球の世高通宝（初鋳年1461年）、サシでは明の弘治通宝（初鋳年1488年）である。弘治通宝は明の孝宋の代（1488～1503年）に鋳造されている。埋納容器内の銭の納置状況から時期差があるのかも知れないが、ここでは同時期のものと考えておきたい。とすれば、本資料は鈴木公雄氏の分類によると、８期に該当し、16世紀の第３四半期の備蓄銭である。今後、周辺の環境を総合的に調査しより良い結論を出して行きたい。

引用参考　文献

出土銭貨研究会　1993『出土銭貨　―創刊準備号―』
山本幸俊　1991『上新バイパス　小重遺跡発掘調査の概要』（業務報告）
新潟県教育庁　文化行政課
鈴木公雄　1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学第61巻第３・４号』
網野善彦・石井　進・福田豊彦　1990『沈黙の中世』平凡社